

摂南大学における実践的地域活動の促進を目的とした新しいキャンパス像の提案

A New Campus Plan of Setsunan University with a View to Promoting the Practical Local Action

池内 淳子

1. はじめに

摂南大学（以下、本学と呼ぶ）では、大学周辺地域において多くの地域活動を実施してきた。例えば、理工学部建築学科および住環境デザイン学科（以下、建築系学科と呼ぶ）では、災害対応力の向上（防災）・水路の魅力発掘（水辺環境）・歴史的建築物の再評価（地域ブランディング）等を実施しており、これらの活動は学生への教育目的だけではなく、時に地域住民と共に行う水路清掃活動等、対話を重視して地域と大学が同じ立場で“協働する場”としても成り立っている。一方、昨今の大学の移転・新規開発では“地域に開かれたキャンパス”をコンセプトとし、例えば大学と周辺を隔てる塀を設けない等、大学所有の空間を通じて地域への明快なメッセージを表現した事例も存在する。しかし、本学寝屋川キャンパスは旧校舎からの建て替え等が継続的に行われているにも関わらず、将来像を見据えたコンセプトを明快に表現しているかは疑問である。折しも、学校法人常翔学園は本学寝屋川キャンパスの校地面積を40%増とする用地取得を発表した（2015年10月）。今後、本学における地域活動を活発にするためにも、また、活発になった地域活動をキャンパスが支えるためにも、本学ならではの地域拠点の具体像を探究する必要性が生じた。そこで本研究では、本学が“摂南大学らしさ”を持つ地域拠点となるために必要な空間的条件を整理し、新しい寝屋川キャンパスの具体像を視覚化するとともに、学内外のステークホルダーに対し公開することで意見を収集する。これらの研究成果を基に、“地域拠点としての摂南大学”が求められている要素について考察する。

2. 研究方法

本研究では、①本学周辺地域の地理的条件の整理、②現キャンパスの課題整理、③新しいキャンパスの視覚化をまとめ、“地域拠点としての摂南大学”が求められている要素に関して考察する。本学理工学部建築学科池内研究室では、これまで本学周辺地域を対象とした調査や自治体・住民等を対象とした防災活動を数々実施している。①では、これらの地域活動の際に分析した結果を用いて、本学周辺地域の地理的条件を整理する。また②では、2016年度と2017年度に実施した建築系学生による現キャンパスの課題抽出結果や、寝屋川市民等へのヒアリング調査結果を用いて整理する。③では、建築系学生および教員からの提案を紹介しまとめる。以上の結果を用いて、“地域拠点としての摂南大学”が求められている要素に関して考察する。

3. 研究結果

3.1 本学寝屋川キャンパスの地理特性

3.1.1 本学周辺地域の模型化¹⁾

図1に本学周辺地域4km×3kmの範囲を示す。本学、寝屋川市駅、香里園駅および寝屋川市役所等を含み、本学の地域活動実績がある成田山、寝屋川市立第八中学校および八木邸等を網羅する範囲をまとめると、東西4km×南北3kmの範囲となった。本研究ではキャンパスの具体像の視覚化をするため、一般の方でも大学周辺地域の理解を深めやすいように、木材を用いた1000分の1模型(1/1000)を製作した。ベースとなる敷地は、榊(本学理工学部住環境デザイン学科教員)が整備したGISデータから、本学建築系学生がソフト(Adobe: イラストレータ)を用いて道路と水路を色分けしてデータとして完成させた¹⁾。次に道路と水路を色分けした敷地データを4mm厚のシナベニア板上に反映させるために、レーザーカッターを用いた。つまり、本学周辺地域のGISデータをシナベニア板上に彫刻することで模型のベースを製作したことになる。また、建物はバルサ材を用いて形と階数を表現した。図2に2016年度建築学科卒業研究展で公開された模型(現在も作成中)を示す。本模型から、本学周辺は住宅密集地であり、水路が張り巡らされている(図2内濃いライン)ことが理解できた。また、京阪電車から東側ではため池が多くなり(図2内上部)、標高が高いことも理解できた。



図1 本学周辺地域(3km×4km)



図2 作成した本学周辺地域(3km×4km)の模型

3.1.2 本学周辺地域の水害リスク^{1), 2)}

2016年8月14日、寝屋川市内では162mm/時の大雨に見舞われ³⁾、摂南大学周辺地域の池田中町においても床上浸水34件の被害が発生した。この地域は河川氾濫による最大5mの浸水が想定される⁴⁾のみならず、このようなゲリラ豪雨等による内水氾濫のリスクも高い。池田中町には多くの農業用水路があり、多くの農地が住宅地に変わった現在でも使用されている。また、農業用水を引き込む前に毎年地域一斉の水路清掃活動が実施されおり、池田中町の浸水リスクの高さを住民の生活面からも示唆している。そこで水路の現況について調査した。

表1に水路に対する事前調査と詳細調査の概要を示す。事前調査日程は12日間であり、その内3日間は雨天時に調査した。また、事前調査項目は水路幅、水の有無及び流れの有無など全10項目とした。詳細調査は前日が晴天だった11月21日と前日が雨天だった28日（総雨量33mm）に実施した。また、詳細調査項目はGLから水面までの距離など全5項目とした。

図3に事前調査と詳細調査の範囲を示す。調査範囲は寝屋川導水路、二十箇水路などの比較的大きな水路がある範囲とし、最も北側には太間排水機場がある。調査範囲内の水路は幅2m以下の比較的狭い水路が多く、その約65%に流れがあり、約30%の水路には水が無いか流れがなかった。詳細調査範囲内の水路では、表1に示す晴天時と雨天時の水位差について調査した。その結果、総雨量33mmの雨が降った翌日、晴天時に比べ最大35mm水位が上がる水路があった一方で、43mm水位が下がった水路もあった。これは、ポンプ制御により配水されていることを示している。2016年の浸水被害は162mm/時のゲリラ豪雨が原因であり³⁾、ポンプ制御が効かなくなった場合に浸水が広がることが予想できる。また、この地域の水路は、最終的に古川に配水される（図3）。古川は幅も狭く住宅地内を流れるため、下流で配水できない場合には摂南大学周辺地域の浸水リスクが高まることが示唆された。本学内には高い建物を有するため、氾濫時の避難所として活用できる。よって、摂南大学は、このような氾濫時の避難地として、また、平常時には水害に備えるための拠点としての役割を果たすことができると考えられる。

表1 池田中町（大学周辺）水路調査概要^{1), 2)}

事前調査	日程	5/19晴、5/21晴、5/25晴、5/26晴、6/16雨、6/29雨、8/1晴、8/12晴、10/12晴、10/18晴、11/16晴、11/19雨				
	項目	水路幅(mm)	水の有無(○、×)	流れの有無(○、×)		
		ごみの有無(○、×)	草の有無(○、×)	濁りの有無(○、×)		
		溢れそうか(○、×)	柵の有無(○、×)	ポンプの有無(○、×)		
		魚・亀の有無(○、×)				
詳細調査	日程	日程	天候	降水量	気温	
				合計	最高	最低
		11月20日(前日)	晴	0mm	20.5℃	13.3℃
		11月21日(調査日)	晴	1mm	16.8℃	12.2℃
		11月27日(前日)	雨	33mm	12.2℃	10.9℃
	11月28日(調査日)	晴	0mm	13.8℃	7℃	
	項目	GLから水面までの距離(mm)		流れの有無		
水の有無		泥の有無	濁りの有無			

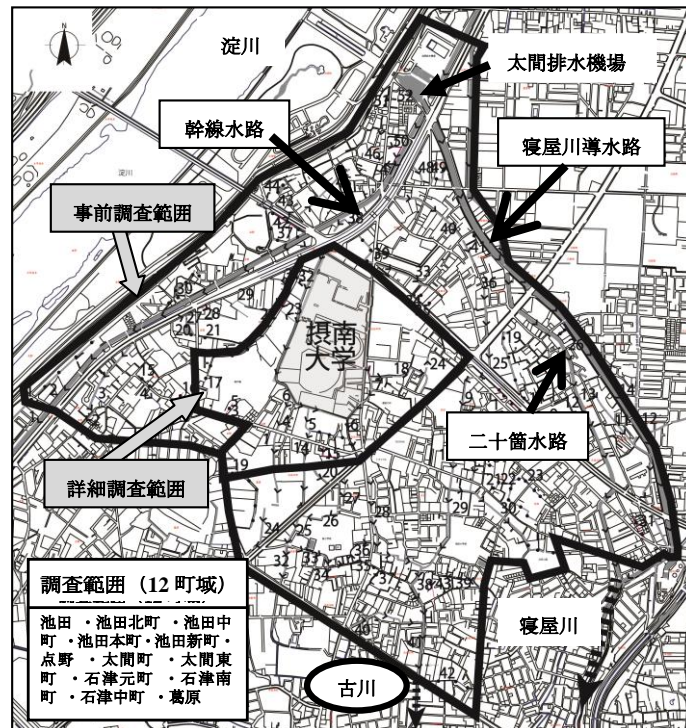


図3 池田中町（大学周辺）水路調査結果^{1), 2)}


3.1.3 本学周辺地域の地震被害想定⁵⁾

寝屋川市は平成31年4月より中核市に移行することが決定されている⁵⁾。寝屋川市は中核市移行に伴い、寝屋川市保健所を開設し、大阪府寝屋川保健所の業務を引き継ぐことになる。一方、昨今の災害後の被災地の復旧・復興においては、従来の急性期の災害医療活動（主に命を救う活動）のみならず、公衆衛生の視点からの活動が重要であることが示されており、厚生労働省は平成28年に「災害時健康危機管理支援チームの設置」を提言した⁶⁾。現在は、この方針に則って災害時に保健師を中心とした被災地支援活動が展開されており、必要な事前研修も実施されている。折しも、2017年度は近畿地方で総合医療防災訓練（通称、政府系訓練）が開催されることになった。そこで、摂南大学と大阪府寝屋川保健所および寝屋川市等で協力し、多機関連携を目的とした寝屋川市総合医療防災研修を実施した⁷⁾。実施概要と研修の様子を表2に示す。

この研修では多機関かつ多職種が一堂に会し行うため、研修内における連携の成果を高める工夫として、摂南大学が寝屋川市被害想定地図を作成した⁷⁾。作成した地図上に示された被害情報を各機関で収集し、寝屋川市災害時医療対策本部会議の疑似開催により情報共有する研修とした。図4に研修用に作成した寝屋川市被害想定地図を示す。本想定地図の元図は寝屋川市の防災マップ⁸⁾を使用しており、避難所とヘリポート、公共施設、病院等、災害時拠点となる定点情報を記載した。また、大阪府や寝屋川市が指定する広域緊急交通路を記載した。さらに、寝屋川市内に現存する「密集市街地」（大阪府指定）を盛り込んだ。研修では、「火災発生」や「道路閉鎖」などの多種多様な被害の中から自組織が対応すべき被害情報を把握し、他組織へ

発信できるかを試した。本研修の成果は文献 7) を参考にされたい。この想定地図作成を通じて、①寝屋川市役所庁舎と医療拠点となる寝屋川市総合センター前の道路が狭く、災害時の脆弱性が懸念されること、②3 か所の密集市街地の被害が復旧を阻む危険性が高いこと、③東西を横断する緊急交通路の不足、が改めて認識された。一方、摂南大学の立地が、府の指定する緊急交通路に挟まれていること、緊急ヘリポートや寝屋川市総合センターからも距離が近いこと、いずれの密集市街地からは距離があること等の利点が明らかとなった。以上のことより、摂南大学の敷地は、寝屋川市における災害時の後方拠点として貢献できると考えられる。

表 2 寝屋川市総合医療防災研修概要⁷⁾

日時	2017年8月20日(13:00-16:00)	【研修の様子】 
場所	寝屋川市立保健福祉センター5F	
参加者	寝屋川市、大阪府(寝屋川保健所と枚方土木事務所)、市内医師会、薬剤師会、歯科医師会、市社協、市内14病院	
研修内容	<ul style="list-style-type: none"> 被害想定地図から各機関が被害を把握 寝屋川市災害時医療対策本部を開催 ⇒どのような情報を収集し共有するか？ 	

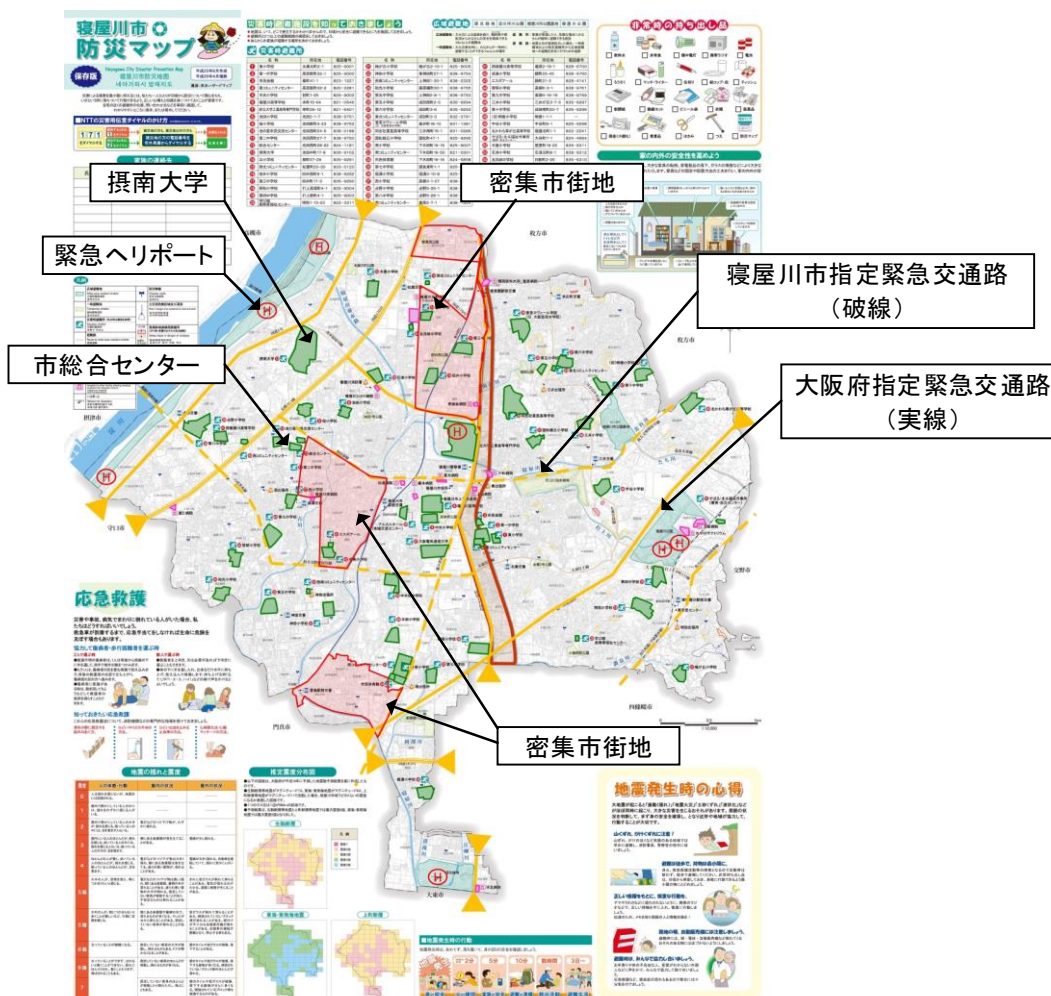


図 4 寝屋川市総合医療防災研修のために作成した被害想定地図⁷⁾

3.2 本学寝屋川キャンパスが抱える課題

3.2.1 学生生活に直接関係する課題

本学寝屋川キャンパスにおける学生生活に深く関係する課題を2点挙げる。第1の課題は、周辺駅からキャンパスへの運輸力（バス停問題）である。今川⁹⁾は、本学の大きな課題としてバス停の位置と狭さについて言及した。特に、本学正門前道路（149号線）について、①メイン道路であり歩道があるにもかかわらず狭く、人や自転車の往来が不便、②横断歩道の通行が危険、と述べた。また、道路に設置されている京阪バスのバス停「摂南大学」は、利用人数の割に狭く、バス待ちの本学関係者が歩道に待機していることを問題視した。確かに、本学学生の通学方法については、特に平日朝1時間目に向かう多数の学生が寝屋川市駅で列をなし、午後になると寝屋川市駅に戻る学生で「摂南大学」バス停は大混雑になる等、多くの課題を持つ。この混雑は、新入生が入学する4月頃が最も顕著であり、5月以降、バス待ちに疲れ、嫌気を感じる学生が駅からの自転車通学を選択する傾向にある。その結果、近隣住民からの本学学生の自転車マナーについて苦言を呈されることもある。本学でも、駅・周辺通路・本学前道路等に監視員を配置する、駅からの自転車ルートを指定する、大日駅からのバスルートを増加する等、継続した対策を行っており、特に周辺地域には相当に配慮している。しかし、残念ながら、圧倒的多数の学生数に比して対処療法的対策に留まっているのが現状であろう。第2の課題は、教室不足である。本学では2010年以降、新学部設置に伴い学生数が大幅に増加にした。増加した学生に必要な教室は確保できておらず、教員・職員の詳細な調整により現在の授業運営が成り立っている。また、昨今ではアクティブラーニング授業が増加している一方でグループワーク用教室の数は足りず、学部学科生を一堂に集められる大教室は予約が困難な状況が続いている。このように大学が優良な教育プログラムを行えば行うほど、種々のプログラムにマッチングする空間（教室）の絶対数不足が露呈する悪循環に陥っている。上記2点の他にも、建物の耐震性不足（一部のみ）、バリアフリー対策不充足（EV停止階となっていない教室が存在する）、食堂やキャンパス内コンビニエンスストアの混雑等の課題がある。もちろん、これら日々の不具合に対し大学側も真摯に対応しており、どのような学生でも自由に本学キャンパスを闊歩し、自身の学びを充実させてほしいと切に願う気持ちは、学内関係者に共通している。今回常翔学園が取得した新敷地により寝屋川キャンパスは1.4倍の広さとなる。この好機を利用し、まずはキャンパスへの学生の運輸力向上と教室不足解消を喫緊の課題とし、解決に導く知恵と取り組みへの継続的な努力が求められている。

在校生の現キャンパスに対する意見を収集するため、学内地域活動団体へヒアリング／アンケート調査を実施した。図5にその結果を示す^{10)、11)}。対象者はボランティアスタッフズ11名とエコシビル部7名であり、主に幹部学生が回答した。ヒアリング項目は、「現在の活動に対する学内スペースの過不足」、「今後欲しいスペース」、「大学に欲しいスペース」（寝屋川市民への調査同様）等とした。その結果、「今後欲しいスペース」として最も多かったのは「カフェ」であり、次に、「広場（摂南生専用）」、「グループミーティングの場所」と続いた。また、屋内ス

ペースや自習スペース等、現キャンパス内に不足しているスペースも挙げられた。以上のことから、本学学生からは、不足する学内スペース（クラブ活動用や自習用等）の拡充が求められていることが理解できた。

3.2.2 寝屋川市民に対するヒアリング結果

図6に寝屋川市民等へのヒアリング調査概要と回答結果を示す^{10)、11)}。池内研究室では2017年度に寝屋川市立石津小学校に対して、「摂南大学にできるかもしれない広場の絵を描いてみよう！」(3.3節)とのプログラムを実施し、その広場案51枚を摂大祭で展示した。ヒアリング対象者はその展示を鑑賞していた人(児童の保護者等)である。ヒアリング項目は、「広場に対する意見」、「摂南大学の利用について」、「今後欲しいスペースについて」等とした。その結果、回答者22名中18名が本学食堂を、また21名が本学図書館を利用したことがなかった。また13名は「校内に入りにくい雰囲気がある」との意見を述べた。さらに、「今後欲しいスペース」として最も多かったのは「カフェ」であり、次に、「広場」(3.3節)、「地域開放スペース」と続いた。市民へのヒアリングは、寝屋川市社会福祉協議会と寝屋川市が実施する「寝屋川市の福祉課題について意見交換し解決策を考える」会への参加者6名にも実施した。その結果、6名全員が食堂・図書館共に利用したことがなく、「カフェ」と「地域開放スペース」は、6名中4名が欲しいスペースとして選択した。以上の結果より、現寝屋川キャンパスは、“地域に開かれている大学”との印象は持たれていないことが浮き彫りになった。

日時	2017年7月10日(月)、13日(木)
場所	摂南大学学内
対象者	ボランティアスタッフズ(11名) エコシビル部(7名)
ヒアリング/アンケート概要	資料配布し、説明後にヒアリング/アンケート実施 【ヒアリング/アンケート内容】 ①クラブの活動内容、②活動スペースの過不足、③クラブとして欲しいスペース、④摂南大学に欲しいスペース(複数項目選択方式)

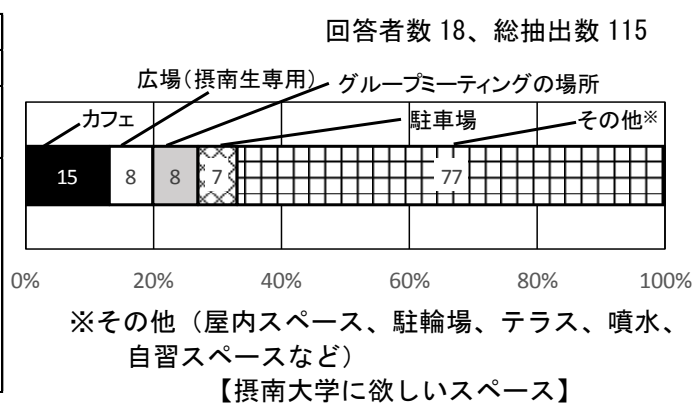


図5 学内地域活動団体へのヒアリング調査概要とその結果^{10)、11)}

日時	2017年10月7日(土)~9日(月)
場所	摂南大学1号館1階ロビー
対象者	石津小絵画の展示鑑賞者22名
ヒアリング概要	石津小1年生の”広場”案を展示し、鑑賞者にヒアリングを行った。 【ヒアリング内容】 ①摂南大学の施設利用 ②”広場”について ③摂南大学に欲しいスペース(複数項目選択方式)

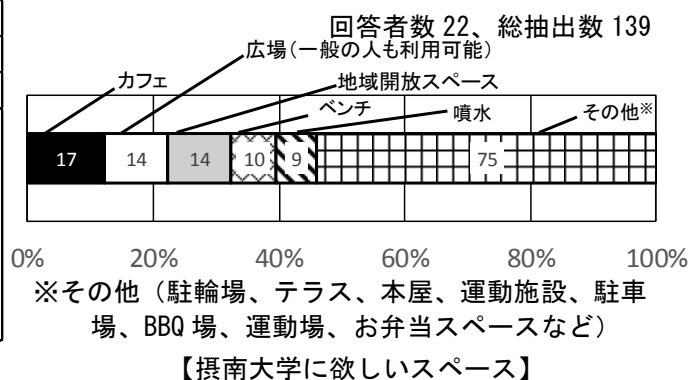


図6 寝屋川市民へのヒアリング調査概要とその結果^{10)、11)}

3.3 新敷地を活用した本学寝屋川キャンパスに対する提案（2016年度・2017年度）

図7に新敷地を活用したキャンパスに対する提案（2016年度と2017年度）を紹介する。図7上部のバス停案は、今川（2016：建築学科竹原研究室）によってなされた⁹⁾。ここで重要なのは、現キャンパス内の正門中庭の軸線を新敷地側に延長し、並木道を新たに設置している点である。並木道の提案者である加嶋（建築学科教員）は、その役割について「キャンパスを貫くことになる並木道は、大学と地域が共有できる場になり得る。また、季節感をともなう摂南大学寝屋川キャンパスのシンボルストリートとして「品格のある」大学キャンパス整備の重要な要素となるとともに、周辺地区にとって持続的な地域資源となる」と述べている。この並木道の北側をバス停、クリエイティブセンターおよび広場とすることで、一帯を地域開放エリアと設定した。クリエイティブセンター案（図7右側）は、2017年度建築学科設計演習Ⅱaの課題として出されたものである¹⁰⁾。また、広場案（図7右下部）については、寝屋川市立石津小学校1年生および住環境デザイン学科学生の提案であった。新敷地側の最北側はもともと鋭角の敷地であり、その活用は難しいとされていた。一方、図7案では、現存する正門中庭からの軸線を、並木道を活用して強調していること、また、その北側の鋭角部分をバス停として活用することで周辺一帯を地域開放することを可能にした。提案の詳細については、文献10)を参照頂きたいが、現敷地との一体感を持たせる意味においても重要な視点であると考えられる。

図7内下部に示す正門道路（149号線）沿い拠点施設案（小林（建築学科教員）および小林研究室、2017）および新校舎案（稲地（住環境デザイン学科教員）および稲地研究室、2017）は、摂南大学融合科学研究所WG（施設）によって提案された。小林は、現キャンパスの保有財産として149号線沿いの豊かな木々に着目し、この木々を生かして149号線沿いが新しい地域資源となるような提案を試みた。小林らは、現キャンパス内の建物が149号線に対し妻面を正対させている状況や、塀に閉ざされた印象が強い現況を改善するために、149号線に沿った低層建物を配置し、塀を取り除いた。この低層建物と塀を取り除いた道路上の木々との一体感が、地域資源の創出につながることを意識している¹⁰⁾。また、稲地は、建築系2学科（住環境デザイン学科および建築学科）のクリエイティブな成果創出を可能にする新校舎として、また、その中に融合科学研究所のスペースを含む建物を提案した。

図7内右上部にある展示空間案は、江頭（2017：建築学科加嶋研究室）によってなされ¹²⁾、学内で学生が創出した成果を地域に発表する空間として提案された。また、図7内左上部にある木造のホール・教室案は、塚本（2017：建築学科小林研究室）によってなされ¹³⁾、現キャンパス内には存在しない木造の低層建物のホールと教室を配置する新しいアイデアを示した。これらは卒業設計として提案されており現実の設計条件はクリアしていない。よって、これらの提案は机上の案であるが、いずれも在校生が本学寝屋川キャンパスの課題を真摯に見つめ、その解決を願った案である。これらの提案から重要なメッセージを受け止め、新キャンパスに反映していく姿勢が必要であると考えられる。

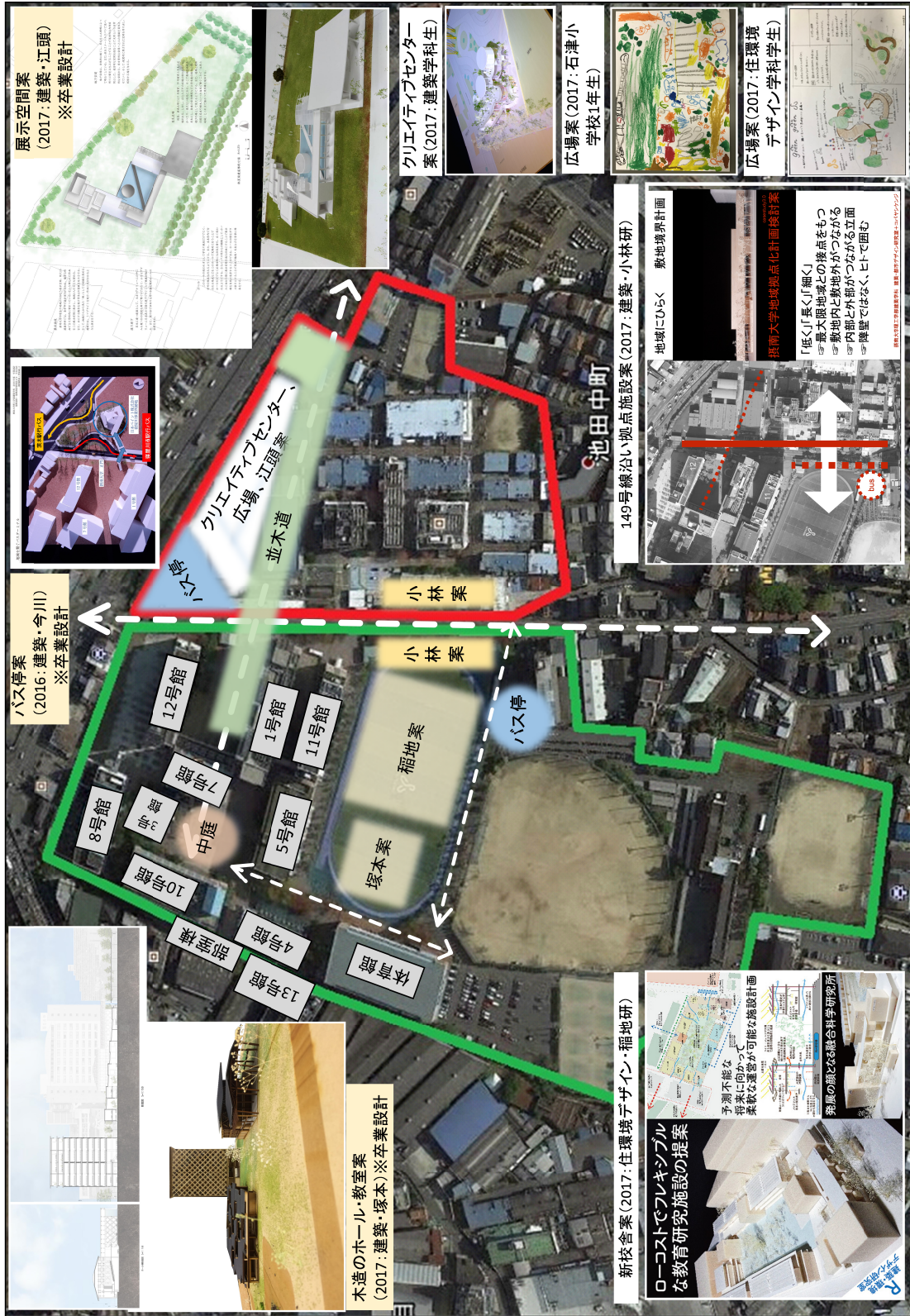


図7 新しいキャンパスバスに対する提案 (2016年度・2017年度) 9), 10), 11), 12), 13)

3.4 学内外への発信

2017年9月、3.1節から3.3節までの内容（3.3節の江頭案および塚本案以外）について、学内向け発表を行った。まず、尾山（生命科学科教員・研究支援・社会連携センター副センター長）は、本学の地域連携活動実績について説明し、本学における地域貢献型の人材育成の重要性について述べた。次に、3.3節の提案について紹介した。さらに、木多（建築学科教員）は、蔦屋とスターボックスが運営する武雄市立図書館の事例を紹介し、本学図書館を新敷地側に移設する案に言及した。そのメリットとしては、①現図書館のスペースを教室に転用できる、②寝屋川市図書館との統合が果たせられれば寝屋川市全体の文教施設がまとめられる、③寝屋川市との共同運営や民間企業（蔦谷）への委託により、新たな公共施設が生まれる、などを挙げた。その他詳細については、文献10)を参照されたい。

2017年11月、学外に対する「摂南大学地域拠点化プロジェクト中間発表会」を実施した。寝屋川市や近隣住民、また企業からもご参加頂いた。第一部を「『いまさら聞けない』摂南地域活動」と題し、岩田（住環境デザイン学科教員）らは寝屋川市と協働したサクラプロジェクトについて、また、加嶋（建築学科教員）らは八木邸プロジェクトについて、さらに、久保（経営学部教員）は本学のヒット商品である「カレーに乗せてはいけない福神漬けプロジェクト」について説明した。第二部では3.3節に示す新しいキャンパス案を地域へ公開した。参加した寝屋川市役所職員からは、「寝屋川市の推進する取組みと深く連携することで、寝屋川市の活性化につなげたい」との意見が得られた。これら活動は「摂南大学らしさ」の象徴であることが改めて認識された。その他詳細についても、文献10)を参照されたい。

4. 地域拠点として摂南大学に求められている要素に対する考察

3.1節から、本学周辺地域は水路が張り巡らされており、外水氾濫のみならず内水氾濫のリスクも高いことが理解できた。本学キャンパス内には高い建物もあり、氾濫時の地域の避難地として貢献できる。また、地震災害時を想定すると、本学は市内3か所の密集市街地からはいずれも距離がある一方で、寝屋川市や大阪府の災害拠点からの距離は近い利点が視覚化された。よって、地震時には公的機関が実施する災害支援活動の後方拠点となり得ることも示された。もちろん、本学は私立大学であり、災害時には本学学生・教職員の安全確保を最優先すべきである。しかし、災害対策は決して「災害時のため」だけに行うものではなく、日常時の組織力向上や地域力向上に役立たせることが可能である。加えて、本学は教育機関であるため、学生のみならず地域にも水害や地震等想定される災害に対する防災教育拠点施設となることで、地域との共生を果たすことも可能である。以上のことから、本学は、日常時、災害時に関わらず「地域からの受け入れ拠点」と「学外への派遣拠点」の役割を果たすことが必要であり、このような姿勢を関係者すべてに理解できるようなキャンパスプランを提案する重要性が示された。

3.2節から、本学寝屋川キャンパスの喫緊課題として、①寝屋川市駅等からの運輸力不足（バ

ス停問題）と②教室不足を挙げた。また本学の地域活動団体のヒアリング結果から、カフェや広場の増設、および不足する学内スペース（クラブ活動用や自習用等）の拡充が求められていることが理解できた。さらに、寝屋川市民に対するヒアリング結果から、食堂や図書館等、地域の方も利用できる施設の利用はほとんどなく、“地域に開かれている大学”との印象は持たれていないことが浮き彫りになった。加えて、市民からはカフェや広場、地域開放エリア等が求められていることが理解できた。

3.3 節では、新しいキャンパスに対する具体的提案を紹介した。ここでは、本学における実践的地域活動の良さが改めて認識された。また、図書館を新敷地側に配置することで教室不足を解消する案や、カフェやコンビニ等地域の方にも利用しやすい民間企業を誘致することによる学内敷地の活用案によるメリットも示された。

以上の結果より、これまで続けてきた地域の実践的活動そのものが“摂南大学らしさ”であることが再認識できた。また、本学の存在価値として、「いかなる状況においても率先して地域拠点となることで地域と共生する」ことが重要であると考えられる。よって、このような地域活動を支えられるようなキャンパスづくりが望まれる。

図8に新しいキャンパスのゾーニング提案を示す。キャンパス北東部の地域開放エリアには、3.3 節で提案された並木道やバス停案を採用し、カフェやバス待ち合いと兼ねられるような広場を配置した。また、図7では並木道の終着点は現7号館であるが、7号館と3号館は耐震性不足のため取り壊し、並木道を現10号館まで延長した。よって、10号館前の中庭は現在より広く豊かな空間となる。また、現ラグビー場周辺の地域開放エリア（図8内中央部）には、現

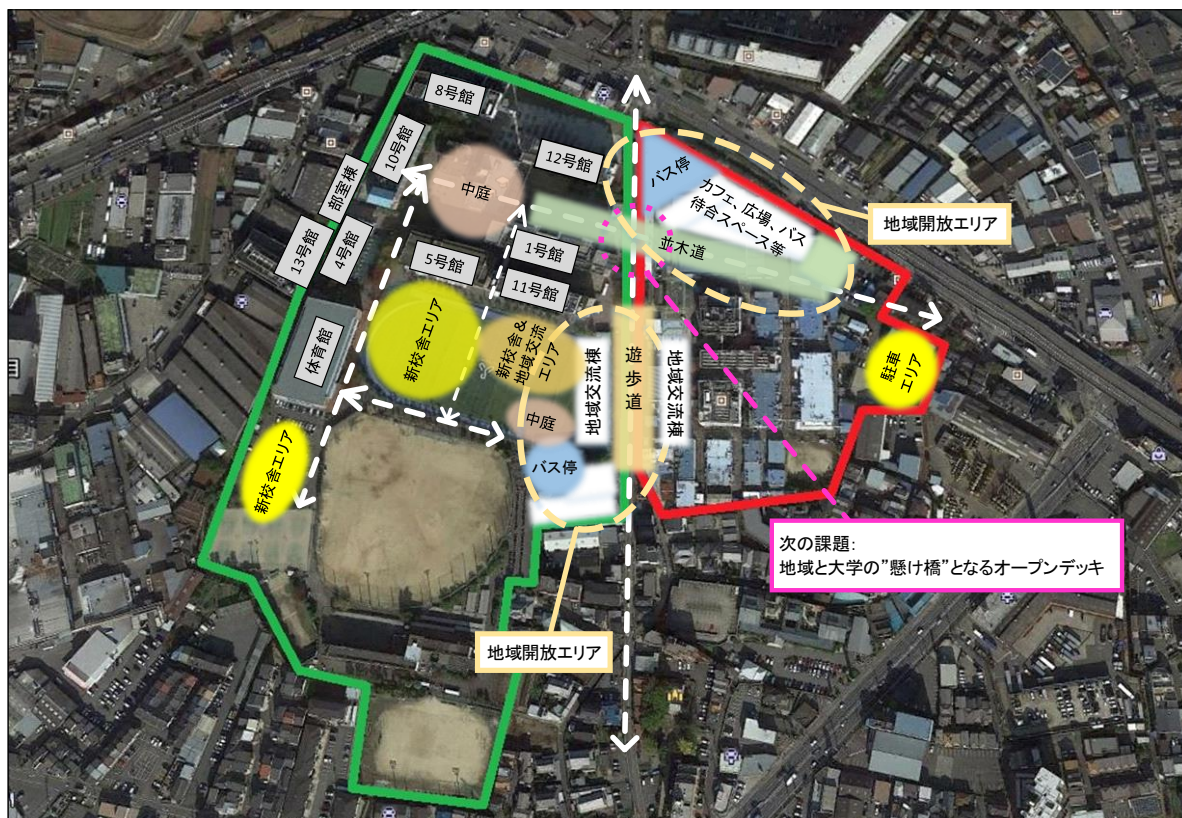


図8 摂南大学の新しいキャンパスのゾーニング提案

有する豊かな木々を残し、本学正門前道路（149 号線）沿った低層建物（地域交流棟）を両サイドに配置するとともに、塀を取り除く。また、北方面行バス停を移設し、新しい中庭も配置した。さらに、現体育館前の通路を軸に新校舎エリア 2 箇所を配置した。この案により、2 つの地域開放エリアと、キャンパス西側に位置する学生の静かな学びの空間のゾーニングが明快になり、同時にバス停問題と教室不足を解消することができる考えた。

これまで得られた結果から新たに浮き彫りとなった最重要課題について述べる。図 8 内遊歩道と並木道が交差する現正門前の交差点の通行方法である。遊歩道と並木道の案はいずれも魅力的であり、本学施設の資産価値を高めることも可能である。よって、この道がクロスする交差点については、幅の広いオープンデッキを設け、デッキ上を緑化しベンチ等を置くことで、学生や地域の方の憩いのスペースを提供してはどうであろうか。デッキがバスを待つ学生の安全性確保に役立つことは言うまでもないが、“このオープンデッキは地域との懸け橋である”とのメッセージを地域に伝え、“摂南大学は地域と共創する大学である”姿勢を明快に示すことは広報戦略上も非常に有効であると考えられる。しかし何より重要なのは、このような新しいキャンパスの“スガタ”をうまく活用し、本学の地域活動がますます発展していくことである。キャンパスが変わっていく“今”だからこそ、考え続けていく必要がある。

5. 結 論

本研究では、本学が“摂南大学らしさ”を持つ地域拠点となるために必要な空間的条件を整理し、新しい寝屋川キャンパスの具体像を視覚化するとともに、学内外のステークホルダーに対し公開することで意見を収集した。その結果、本学は、「いかなる状況においても率先して地域拠点となることで地域と共生する」ことが重要であることが示された。また本学の喫緊課題は、バス待ち問題と教室不足であり、在校生からは不足する学内スペース（クラブ活動用や自習用等）の拡充が求められていることが、また地域からは、カフェや広場等、地域開放エリアが望まれていることが明らかとなった。

本研究では様々な立場の学内外関係者が本学の新しいキャンパスに対する提案を行った。どの案も夢や希望が込められており、本学がこれまで以上に期待されていることを示唆していた。これらの案をふまえて、“地域拠点としての摂南大学”が求められている要素について考察したところ、現キャンパスは決して“地域に開かれた大学”を体現するものではないことが明らかとなった。しかし、これまで本学が積み上げてきた実践的な地域活動は“摂南大学らしさ”そのものである。よって、今回の敷地拡大を好機とし、摂南大学らしい地域活動を支えられるキャンパスづくり、また、地域からも活用されるキャンパスづくりを続けていく必要がある。また、“摂南大学は地域と共創する大学である”ことの姿勢を明快に示すことで、本学の地域活動をますます発展させることが重要である。

参考文献：

- 1) 池内淳子他、摂南大学が地域の拠点となるために必要な空間的条件の整理、2016年度摂南大学研究助成「Smart and Human 研究助成金」成果報告書、摂南大学地域総合研究所報第2号、pp.103-107、2017年3月
- 2) 細川巧、池田中町における水路調査を基にした内水氾濫対策、摂南大学卒業論文、平成29年1月
- 3) 寝屋川市、平成24年8月14日の短時間豪雨による災害検証報告書、平成24年12月
- 4) 寝屋川市、寝屋川市洪水マップ、平成25年6月
- 5) 寝屋川市中核市推進課 HP（2017年2月25日取得）、
http://www.city.neyagawa.osaka.jp/organization_list/keieikikaku/chukakushi
- 6) 厚生労働省、災害時健康危機管理支援チームについて（DHEATとは？）、（2017年2月25日取得）
<http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10901000-Kenkoukyoku-Soumuka/0000131931.pdf>
- 7) 才脇知央、保健所と連携した寝屋川市内の多機関が連携する災害研修の実施と考察、摂南大学卒業論文、平成30年1月
- 8) 寝屋川市、寝屋川市防災マップ、平成25年6月
- 9) 今川真衣、地域をつなぐバスターミナル、摂南大学卒業設計、平成30年1月
- 10) 池内淳子他、摂南大学が地域の拠点となるために必要な空間的条件の整理、2017年度摂南大学研究助成「Smart and Human 研究助成金」成果報告書、摂南大学地域総合研究所報第3号、pp102-106、2018年3月
- 11) 谷本俊、摂南大学寝屋川キャンパスの活用に関する考察、摂南大学卒業論文、平成30年1月
- 12) 江頭勇樹、人から街へ、街から人へ、摂南大学卒業設計、平成30年1月
- 13) 塚本雄人、街にひらかれる木造キャンパス、摂南大学卒業設計、平成30年1月

謝 辞：

本研究は、2016年度摂南大学研究助成「Smart and Human 研究助成金」（池内淳子、竹原義二、本多友常、加嶋章博、小林健治、大谷由紀子、川上比奈子、榊 愛、岩田三千子、平田陽子）と2017年度摂南大学研究助成「Smart and Human 研究助成金」（池内淳子、竹原義二、尾山 廣、加嶋章博、小林健治、本多友常、榊 愛、岩田三千子、木多彩子、森山正和）の支援を得て実施しました。また、寝屋川市立石津小学校1年生の皆さんや住環境デザイン学科学生諸君、住環境デザイン学科稲地研究室、建築学科小林研究室、建築学科竹原研究室および建築学科加嶋研究室から新提案を頂きました。さらに、寝屋川市等自治体の皆様、京阪バス（株）等学外企業の皆様、建築学科2017年度設計演習Ⅱa担当の先生方、摂南大学融合科学研究所WGの皆様、エコシビル部とボランティアスタッフズの学生諸君、理工学部川野先生（学部長）、理工学部熊谷先生（学部長補佐）、理工学部石田先生、経営学部久保先生、本学理工学部事務室および研究支援・社会連携センター職員には多大なるご協力を頂きました。最後に、2016年度S&Hプロジェクトには47名の本学建築系学生に参画頂き、プロジェクト外でも建築学科学生諸君には2年間にわたりご尽力頂きました。ここに謝意を表します。